

聖書日課 『からし種』 2023.6.18-6.25

<p>6月18日 (日) II 列王 16章</p>	<p>「アハズ王は、アッシリアの王…に会おうとしてダマスコに行き、ダマスコにある祭壇を見た」(10節)。アハズ王の第一の関心は、アッシリアに取り入り、その力添えで自国の安泰を確保すること。だからアッシリアの神礼拝を真似することに何の良心の呵責も感じなかったのだろう。その点で私たちの神礼拝はどうだろうか。第一のものを第一にできているだろうか。</p>
<p>19日 (月) II 列王 17章</p>	<p>「しかし彼らは聞き従うことなく、自分たちの神、主を信じようとしなかった先祖たちと同じように、かたくなであった」(14節)。イスラエルの人々の「かたくなさ」を想う。イザヤはそれを「鉄の首筋」(48:4)と呼んだ。神の愛の呼びかけにも「頑として振り返ろうとしない姿」が浮かぶ。わたしは今日、主の呼びかけに振り向く「やわらかさ」を持ち合わせているだろうか。</p>
<p>20日 (火) II 列王 18章</p>	<p>「彼(ヒゼキヤ)は主を固く信頼し、主に背いて離れ去ることなく、主がモーセに授けられた戒めを守った」(6節)。王たちは常に「経済的繁栄」と「主なる神への信仰」とどちらを第一に優先すべきかを問われた。ヒゼキヤ王の周囲にもさまざまな立場の人がいて、どの声を採るべきか、毎日が闘いだっただろう。今日「主を固く信頼する信仰」に立たせてください。</p>
<p>21日 (水) II 列王 19章</p>	<p>「ヒゼキヤはそれ(手紙)を主の前に広げ、主の前で祈った」(14-15節)。ヒゼキヤのもとにアッシリア王の恫喝の手紙が届いた。北イスラエルを滅ぼした脅威が現実となり、ヒゼキヤの心は震えあがったことだろう。その時、ヒゼキヤは「主の前で祈った」。祈るほかなかった。しかし、主の前に「小さくされたヒゼキヤ」は主の大いなる憐れみを体験することとなった。</p>

聖書日課 『からし種』 2023.6.18-6.25

<p>22日 (木)</p> <p>Ⅱ 列王 20章</p>	<p>「こう言って、ヒザキヤは涙を流して大いに泣いた」(3節)。たとえ王であっても、病気による死の宣告の前に無力である。どれだけ富を持っていても、家臣に威張り散らせたとしても、人は死に打ち勝つことはできない。「大いに泣く」ほかないのだ。私たちの命は、主なる神の憐みの御手の中にある。そして私たちにとって「最善」をご存知の方の御手の中にある。</p>
<p>23日 (金)</p> <p>Ⅱ 列王 21章</p>	<p>「主はかつて、『エルサレムにわたしの名を置く』と言われたが、その主の神殿の中に彼(マナセ)は異教の祭壇を築いた」(4節)。父ヒゼキヤが主の前で渾身の祈りをささげ、主の前に大いに泣いたことが、息子マナセの信仰に何の影響も与えていないことに愕然とする。父は父、息子は息子。一人ひとりが主なる神の前に立ち、その信仰を問われることになる。</p>
<p>24日 (土)</p> <p>Ⅱ 列王 22章</p>	<p>「この見つかった書の言葉について、わたしのため、民のため、ユダ全体のために、主の御旨を尋ねに行け」(13節)。マナセ王の暗黒の55年間の後、8歳で即位したヨシヤ王に「主なる神への信仰」を教えたのは誰だっただろう。時代がどうあろうと、忠実に主なる神を礼拝し続けた「人びと」の存在を想像する。今日「主の御旨」を大切に尋ね求める者とされて。</p>
<p>25日 (日)</p> <p>Ⅱ 列王 23章</p>	<p>「ヨシヤは、『あそこに見える石碑は何か』と言った。町の人々は、『神の人の墓です。この人はユダから来て、あなたがベテルの祭壇になさったことを予告しました』と答えたので」(17節)。Ⅰ列王13章で、神の召命を果たしたのに預言者仲間に欺かれ、死んでしまった神の人。長い時を経て、予告された本人ヨシヤ王を感動させる働きに再び用いられた。</p>